
タイトルなんて意味のない物語

名も無き人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトルなんて意味のない物語

【Nコード】

N7580F

【作者名】

名も無き人

【あらすじ】

この物語は彼と彼女の物語。彼と彼女の道を塞ぐのは破滅かそれとも始まりなのかもしれない。．．．それを知っているのは傍観者と神のみぞ知る。

登校時に

「さあ始めよう。終焉の物語を。誰も望まなかったけどおきてしまった物語を。彼と彼女が出逢った物語を・・・今はじめよう。」

「君は誰かって、うーんとボクはね。この物語の語り部で唯一の傍観者なのかな。まあともかく彼と彼女の物語のはじまり、はじまり。」

・・・

・・・

・・・

ピピッと味気ない携帯のアラームが鳴る。なんで話の始めって、寝起きが多いのだろう。そんなこと考えながら目を覚ます。

もちろん、どこかの話みたいに幼馴染がやさしく起こしてくれたり、ブラコンの妹がお兄ちゃん隣の隣で寝ていることもない。

そんな出来事が現実で起こりえるのだろうか。だとしたらそいつは
どういふフラグを立ててきたのだろう。

くだらないことを考えていたからか携帯のアラームが再度味気ない
音で鳴る。どうやらうとうととしていたらしい。

眠い気持ちを切り替えて体を動かすことにする。いつもの場所にか
けてあつた制服に着替える。うちの学園の特徴と聞かれたら

まずこの制服の詰襟としか思いつかないぐらい有名らしい。ついた
名前が詰襟学園。正式な名前は・・・なんだっけ。

頭の中で意味のないことを考えながら黙々と朝するべきことをする。
朝食だったり、昼食つまりは弁当をつくったりしているうちにいつ
もの時間、

つまり登校時間が来たので学園に向かうことにする。登校時間の間
に自己紹介でもしておこう。誰にって聞かれても僕もわからない。

強いていうならお空があおいから、つまりは深くは突っ込むなつて
こと。まあともかく僕の名前は このまえりん 凛

名前については突っ込むことが多いと思うが無視の方向で。女ばい
名前とか言っな。通称、詰襟学園の2年で身体的特徴としてメガネ
でチビ

そして不本意なことに詰襟学園（通称）で女装が似合う男子2年連
続NO.1とある事を除いては極めて普通の高校生のはず。むしろ

そうであってほしい。

家族についてはちょっと事情があって現在一人暮らし、そして彼女もなし。

自己紹介というくだらない一人遊びに耽っていたせいか前にいた人に気づかずぶつかってしまっ、無論かわいい女の子ではなく、むさくるしいごつい男だ。

むさくるしくてごつい男は機嫌でも悪いのか、こちらを睨みつけてくるので僕もにらみ返す。

「おい、てめえ なに俺にぶつかってきてるんだよ。喧嘩売ってのか？」

「いえ、喧嘩などは売ってません。先ほどはぶつかってしまいすいませんでした。」

僕は面倒なことが嫌いなのでサッサと謝り歩き出そうとするが、先ほどの謝罪ではむさくるしいごつい男は気に食わなかったらしく僕の肩をつかむ。

「おいおい、謝ってすむなら警察はいらないだろう。今ので肩の骨が折れたから慰謝料を払え。」

今時、そんな人間どこにもいないと思うけどな、めんどくさい相手にぶつかつたなと思いつながら応対しながら歩き出す。もちろん僕の肩の手は払って。

「はい、それでは慰謝料はいくらぐらいですか？」

「30万円だ。」

「はーあ、高いですね。僕、そんなにお金もっていません。現在の所持金はなんと10000円です。」

「それでも払え。」

「いやです。」

「払え。」

「いやです。」

そのやりあいは何度か続いて、いい加減きりが無いと思ったのか、男の声に変化する。

「おい、人が優しくしていればつけあがりやがって、払わないだったら」

「払わなければ、何かするのですか、この警察署の前で、すごいな。お兄さん。勇気があるな。警察署の前で恐喝するなんて」

さすが男はここがどこだか気づいたみたいであわてて口を噤むが時既に遅し、むさくるしいごつい男よりもさらにごつい男がつまりは警察官が

「話なら署でききましようか。その君」

といて男を引きずっていった。男は覚えていると悪役みたいな言葉を言っていたかどうかは定かではない。

そうこれが僕の変わっていることのひとつ、絶対不運、つまりはこっちが何もなくてもトラブルが喜んでやってくるってこと。

登校時に（後書き）

楽しんでいただければ、幸いです。
誤字、脱字、感想などいただければありがたいです。

学校にて（前書き）

誤字、脱字、感想などがあればお願いします。
多少はやる気が出ます。

学校にて

キンコーンカンコーンと聞きなれたチャイムの音が鳴る。

ようやく4限目が終わり、昼休みに突入する。

でも僕は休み時間に入ったにもかかわらず、ずっと頭の中によぎっていたことを考え続けていた。

それは、僕の能力のひとつ、絶対不運についてだ。この能力を自覚したのはいつ頃だったのかということだった。

絶対不運、命名は僕だ。センスがなくてごめんなさい。まあそれはいいとして。

今朝あった出来事は別段珍しいことではなかったのけれど、むしろいつも通りとも言えるが、僕は中学生の頃までは普通だったような気がする。

普通に友達がいて、普通に遊んで、普通に生活していたはずだった。なのにある日突然おかしくなった。まずはじめはクラスの人たちだった。

その日は確かなんでもない普通の日だった。普通の生活が続くと信じていた僕はいつも通りに学校に行き、いつもどおりに過ごす予定だった。

だが僕が信じていたものはすぐに壊れた。クラスの人たちはまるで僕がこの世に存在してはいけないもののような扱ったのだ。つまりは無視^{しかと}だ。

その日はただそれだけだった。次の日にはクラスの人たちはまるで人が変わったかのように僕に暴力を振るった。その時はただ軽い怪我をしただけだった。

日に日に暴力はエスカレートしていった。だがそれだけではなく僕の能力は先生に友人にそして家族にも影響していった。

しかも最悪なことに僕に近ければ近いほど、影響するのが遅いが、この能力、絶対不運が発動したときの危険性が増す。

この能力が発動したときに家族からは包丁で刺された。まるでそれが当たり前のようだ。だがこの能力の怖い所はそこではない。

この能力の怖いところは僕を傷つければ傷つける程、自分に戻ってくるところだ。しかもそれがそのまま戻るのではなく何倍にも膨れ上がって戻るところだ。

例えば、僕をいじめたクラスの人たちは、全員骨折だし、友人に至っては半身不随、家族については植物人間で医者から意識はもう戻らないだろうと言われた。

最初は偶然だろうとそんなことはありえない。そう思ったかった。でもそれはできなかった。

なぜなら傷ついたのは僕に関わった人間のみだったし、被害は増え

続ける一方だったからだ。

こうして僕は「歩く不幸」と呼ばれるようになった。そして僕がそう呼ばれるようになってから人には近づかないように努力した。

それから2年経った今でもそういう生活を続けているせいで友達はいない。僕の人生、どうなるんだろう？

そんなことを考えていたからか昼休みが始まって15分以上経過していた。

僕が教室にいるのが珍しかったのかクラスメイトが話しかけてきた。

「珍しいな。――このまえが教室にいるなんて、明日は雪かそれとも槍でもぶってくるのか。」

「言われなくても、消えますよ。ちょっと考えごとをしていただけです。」

クラスメイトに一言返すと僕はいつもの場所に向かった。

「おい、たまには一緒に食べないか・・・ってもういないし。」

「なにか言ってたような気がしますけど、まあかわらないほうが

いいでしょう。」

特に意味もないことを考えていると目的の場所に着く。まあありきなりに屋上ですけど悪いですか。お空しか友達がいないけど悪いですか。

はっ、屋上だからついっい解放的になってしまった。早く弁当でも食べよう。時間もないことだし。今日は何かな。楽しみだな。

やって悲しくなるから早く食べよう。・・・ふうーおいしかった。腹ごなしに軽く運動でもしようとしたときに屋上のドアが突然開いた。

そして閉まった。という僕の願望も空しく扉は開かれた。一応立ち入り禁止のはずなんだけど、いやな予感する。

とっさに隠れると先ほど僕に話しかけてきたクラスメイトと上級生が3人ほど屋上に入ってくる。いきなり険悪な雰囲気だ。

上級生は僕のクラスメイトに対してお金を取るうとしている。つまりはかつあげだ。だけど抵抗しているみたいだ。

喧嘩になりそうな雰囲気だ。っていうか殴った(クラスメイトが)。殴られた(クラスメイトが)。うわっばこぼこだ(クラスメイトが)。

上級生はクラスメイトのぼこぼこの顔を見て満足したのか捨て台詞を残して屋上から去って行った。

「金は明日までもってこいよ。後はお前とちびメガネだけだ。一応言っておくがこれは生徒会から警告だ。次はないぞ。」

しばらくして、クラスメイトが

「そこにいるんだろう。出て来いよ。」このまゝ

悲しいことに僕の居る場所とクラスメイトが向いていた方向は全くの逆だった。

「えっーと何か用ですか。ちなみに僕は君の後ろにいます。」

クラスメイトは恥ずかしそうに振り向くと

「さっきの話、聞いてはいたんだろうけど一応言っておく。名目上の生徒会費を払っていないのは俺とお前の2人だけらしい。」

払わないと酷い目にあうらしい。さっきの俺みたいにな。気をつけるよ。」

「はあ、分かりました。話はそれだけですか。それならもう行ったほうがいいと思いますよ。昼休みが」

次の言葉を言おうとした瞬間に5限始めのチャイムになる。

「もう遅かったみたいですけどね。」

「お前、授業は受けなくていいのか？ 不真面目な俺が言うのも何だが授業は受けた方がいいぞ。」

「今日は自主休講です。今から昼寝するので邪魔しないでください。」

「お前、やっぱり面白いな。真面目そうに見えて、全然まじめじゃない。それなのに成績が学年5番以内ってどういうことだよ。」

「あんなのは教科書を見れば、誰でも分かるでしょう。っていうか本題はなんですか。僕は変化球が苦手なんで直球で勝負してきてください。」

「本題、本題か、別に本題はないんだけど俺と友達にならないか。」

「拒否します。」

「噂はいろいろ知ってるんだけどな。歩く不幸さん。」

普通の人知らないはずの名前が出てきて、多少びっくりする。ただのクラスメイトと思っただけならなかなかな、一応警告はしておく。

「それを知っていて何故かわらうとするんですか。あなたは僕の恐ろしさ知らない。あまりにも知らなさすぎる。だから」

「だから関わるなどでも。俺は俺がどの程度のものか知りたいだけだ。お前が勝つか俺が勝つかそれを試したいだけだ。」

「あなたも相当変わってると思いますけど、まあいいでしょう。あなたと友達になりましょう。」

「案外、折れるのがはやいのな。」

「今まで、そうやってきた人は何人もいましたよ。今は一人もいないですけどね。」

「おーっ 怖っ。」

こうして僕は授業中の屋上で彼と友達になった。果たして彼は僕に
勝つのかそれとも

それよりもお金、どっちがよっぽど？

放課後に(前書き)

彼女はまだ出てきません

放課後に

「今、思ったんですけど友達って言われてなるものじゃないと思いません。」

突然ですがこんにちは。夕方って挨拶に困らない？こんにちはって言えば良いのかそれともこんばんはが良いのか

まあそれはどうでもいいんだけど、やっとだるい授業が終わったの言うのに先ほど友達になったクラスメイトと何故か一緒に帰って会話をしています。

何故こうなったのかというと

「^{このまえ}一様、お時間はありますか、時間があれば一緒に行っていたみたいです場所があるのですが？」

「なんだ。時間ならあいてるけど、どこか行くのか。」

「ありがとうございます。それなら参りましょうか。いざ鎌倉へ。」

このような会話があったからだ。もちろんこんな会話じゃなかったけど似たような会話をしたのは確かだったはず。

こいつとのフラグが立っていたとは全くもってびっくり。

「なんだよ。唐突に。お前と俺はもう友達だろう？」

「それはそうなんですけど、僕はキミの名前すら知らないんですよ。果たしてそれで友達言えるのでしょうか。」

「おいおい、クラスメイトの名前ぐらい知っとけよ。俺の名前は」

「今なら引き返せますよ。名もないクラスメイト君。」

彼の自己紹介を遮って、最後の忠告をしておく。なんとなく名もないクラスメイトを思って。まあ意味がないと思うけど。

「おいおい、おいおい、またその話か。それはもういいって。俺の名前は八雲やくも音おと」

好きな言葉は三度の飯よりも勝負。まあ負けるのは大嫌いだけだな。とりあえずよろしく。」

「さつきは負けたたよつな記憶があるんですけど……まあとりあえずよろしく、音おと。えっと僕の名前は」

「お前の名前は知ってるから別に自己紹介しなくてもいいぜ。一応クラスメイトだしな。」

「それはさっきの仕返しですか。ともかく明日、どうするんですか？
音。」

「明日、明日、明日ってなんかあったけ。あああれね。あれはお前は気にしなくいいぜ。俺がなんとかしとく。」

「大丈夫なんですか。それならまあいいです。」

「いやそこは僕も手伝いますけどぐらいは言ってくれてもいいんじゃないんですか。凜くん」

「いや、君が問題を解決してくれるならそれに越したことはありません。でも一応言っておきましょう。手伝いましょうか。」

「その言葉を待ってたぜ。というわけでお前は明日来るな。多分すごいことになるから。」

「つまり足手まといだから。家でおねんねしてな。役立たずってことですか。」

「いやそこまで言っていないから。とにかく学校には来るな。明日はやばいような気がする。」

それにお前の噂が本物ならちろん俺は信じていないけど、学校には来ないほうがいい。」

「つまり、僕に被害があるということですか。それは困りますね。」

せつかく噂が届かない遠いところまで来たんですから。それなら明日は休むかもしれません。」

「かもしれない。ってことは来るかもしれないのか。明日ぐらいは」

「休めって言われても、この世には絶対なんかありませんから、確約はしません。でもできるだけ休むようにします。」

「それならいいけど。おっと着いたぜ。俺の家にようこそ。」

着いたのは彼の家もお好み焼き屋だった。行きたいところって自分の家かよ。おまえの行きたいところって・・・

そんなツッコミを心の中でしながら、サッサとお好み焼き屋に入ってしまう僕だった。

だってお好み焼き好きですから。

放課後に（後書き）

誤字、脱字、感想などがあればお願いします。

多少はやる気があります（嘘です。かなりやる気があります。）

再び、学校にて（前書き）

彼女はまだ登場しません。

再び、学校にて

おはようございます。って言ってももう昼なんだけどね。僕はなん
で自分に突っ込んでるんだ。これではまるで痛いひとじゃないか。

まあそれはいいとして、何でこんな時間に学校ではなく家にいるの
かって。それは・・・別に風邪を引いた訳でもない。もちろん不登
校という訳でもない。

さぼりだ。あれ不登校とさぼりって同じ意味なんじゃ・・・まあい
いや。ともかく昨日、音おとに言われたとおり忠告を守っているってこ
と。

久しぶりに心配してくれる人がいたので案外嬉しい僕。なので学校
を休んでるわけ。わけなのです。

・・・悪いか。音おとといえば昨日のお好み焼き、おいしかったな。

まさか、あそこまでおいしいとは、ソースのおいしさがあそこまで
キャベツをひきたてるなんて、

それにあの豚肉あそこまでカリカリに焼かれたら、僕はもう・・・
って僕はなにを言ってんだ。

とmy worldに入っていると携帯がブルブルと鳴る。いやブル
ブルと震えている。

まるで雨に濡れた子犬がこちらを見つめてくるように。ってなんか

今日テンション高いな。僕

ちよっと冷静になったところで携帯を開く。そこには新着メール1件ありの文字が。

また迷惑メールかと思い、無視する。否。無視しようとしたが何か嫌な予感がした。

昨日、音はなんて言っていた。思い出せ。たしか、明日はたぶんやばいような気がする。そんな根拠がないことを言っていたような気がする。

でも僕の噂を知っていたぐらいだからな。あれは根拠のないことじやなく確信に基づいたものなら・・・やばい。あわててメールを開く。

メールの内容は・・・って迷惑メールかよ。なんか肩すかしをくらった気分だな。でも嫌な予感は消えない。こういうのは一度思ってしまうと

どこまでもひつついてくる。まるで性質の悪いストーリーカード。うーん性質の悪くないストーリーカードっているのか。まあいいや。こういうときは動くに限る。

見つからないように学校に行こう。それで音が無事ならまあ帰ればいいし、無事じゃなければ助けるだけ。

もしこの物語を見ていた人がいるならたぶん笑うだろう。なんで友達になってたっただけ1日なのにそこまでして助けようとするのかと。

なので僕はこう言うだろう。

友達だからと。ただ理由はそれだけで十分だ。まあ現実には起きないだろうけど。音は普通に学校に行つて、普通に生活しているはずだ。

でも制服に着替えて、急いで学校に向かう。一刻も早く自分の不安を解消するために。

学校に着いたとき、僕の不安が的中した。

そこはすでにおかしな空間になっていた。授業中なのに異常に騒がしいし何か空気が狂ってる。

まるで僕が刺されたあのときみたいに。

「おにいちゃん、おにいちゃん、おにいちゃん、おにいちゃん、すぐにわたしが××してあげる。」

今は聞こえないはずの幻聴が聞こえたような気がした。

ここはやばい。そう身の危険を感じた僕は隠れようとするが、どうやらそれはすでに遅かったみたいで何者かに後頭部を殴られたあとだった。

当然、僕は意識を失った。

意識が戻ったのは辺りが真っ暗になってからだ。まず状況を認める。うん縛られてる。力をいれてもびくともしない。

どれだけ縛り好きだよ。っていつかここはどこだよ

「ここかここは生徒会室だが。縛っているのは、うん君が危険だから縛らせてもらった。といことにしよう。」

まさか音君おとの忠告を守らずに来てしまうとは、まあいい。どちらにしる、君が俺の目的だったのから。あるときからね。」

聞いたことのない声だった。それに僕は喋っていないはずなのに。しかも姿が見えない。

「まあ、なんとなく分かったっていうことにしといてくれたまえ。ともかく君は「このまえりん凛君で

まちがないね。」

まあ俺が間違える訳がないけどと付け足して僕が「このまえりん凛がどうか確認してくる。

「違うと言ったら家に返してくれるのですか。」

「いやそれはないけどね。一応確認しておこうと思って。お約束だよ。」

「まあ僕がそうですけど、貴方は何者なんですか？」

「俺はこの学園の生徒会長。名前なんて名乗るものじゃないさ。特に君、いや歩く不幸君の前ではね。」

「あれ、僕のことを知ってるのですか。その名前は此処じゃ知ってる人はそういないはずなんですけど。」

「知ってるさ。君のことはね。最初に言っただろう君が俺の目的だつて。」

「でその目的は何なのですか？」

「とても陳腐なものだけど復讐さ。俺は君に復讐するただけに生きてきた。」

「そうですか。音はまだ生きていますか？」

「クールだね。普通ならこの状況で俺を恐れることは出来てもそこまで冷静じゃいられないと思うのだけど」

計算が狂ったな。まあある意味計算どおりか。ちなみに俺がなんで君に復讐したいのかは聞かないのか？」

「ええ。言われても僕にはもうどうしようもないことですから。」

「ふむ。なるほど。音君おとは今は無事だ。今後無事かどうか保障はできないけどね。」

「それならいいです。まあなんとかするでしょうから。今更なんですけどこんなことして大丈夫なんですか？」

「俺の心配かい。いや、俺は捕まるだろうね。危険な橋は相当渡ってきたんだ。それこそ今更だ。」

君への復讐こそが俺の生きがい。復讐さえできれば死さえ厭わない」

「そうですね。」

「例えば俺が全校生徒の命を握ってると言われても君は顔色一つ変

えないだろう。だがどうだ。君の友達の命を握っているといえは「

そう。その顔が見たかったのだよと言って生徒会長は狂ったように笑った。

再び、学校にて（後書き）

誤字、脱字、感想などあればいただけると嬉しいです。以上

閑話（前書き）

彼女接近中（今回の話では彼と彼女は出てきません）

閑話

そこは会議室だった。

ただ会議するためにある部屋は今はその用途では使われていないようだった。

というのも会議室だと言うのに議論を交わそうとするものはそこには一人もいないようだった。

そこにいる人物たちは円卓に座っていた。時計のように12人。

何かを待っているようだったし、何か考えごとをしているようにも見えた。

状況が変わらないことにいらついたのか、

時計でいう7時の席に座っている人物が声を出した。

「おい、どうするんだ。このままでは彼と彼女が出逢ってしまう。

彼女を早く捕まえないと。」

「どうやって捕まえるのですか。七。^{なな}彼女は我々の監視を出し抜くほごですよ。」

「だいたい彼女を捕まえられる人間なんて」

「いない。なんてことはないだろう。九。我々が動けば。」

「それは・・・たしかに我々の誰かが動けば彼女は捕まえられないでしょう。ですがそれでは

かの者の思い通りに。だいたい彼と彼女はほっておいても問題ないのでは？」

「あの事件を忘れたとは言わせんぞ。九。彼と彼女はほんの一瞬出逢っただけだ。それだけであれだけの力が観測された。

世界の100000分の1程度を消す力だ。その程度の力は別段大したことはない。

国がもっている力としては妥当だ。だが個人として持つ力としては破格だ。

ありえないといってもいい。我々でさえその力を出すことが難しい。しかも」

七ななの喋りを遮り、それまで沈黙を保っていた人物の一人。

時計でいう12時の席に座っている人物が口を開く

「そこまでだ。七なな、九く。今はそのような昔話をしている場合ではない。一刻も早く、彼女を捕まえなければならぬ。その為に七ななの言うとおり我々の誰かに動いてもらう。四し、君が我々の中で彼と彼女に一番近い。動いてくれるか。」

時計でいう4時の位置に座っている人物が静かに問う。

「あれはどつする。」

「あれは君が動く間、私が受け持とう。」

「ですが？ 十二^{じふふた}。あれを受け持つと貴方にもかなりの負担がかかるはず。」

「いいんだ。九^く。その方法なら我々の誰にも迷惑をかけない。よって議決をする必要もない。これで問題はないな。四^し」

「了解した。」

そついうと四^しの姿はまるで存在しなかったように消えさつた。

どうやらここにいる人物は全員ホログラフィーで会議室にいる人物はひとりもないようだった。

「で。十二^{じふふた}。あんたは大丈夫なのか。」

あれは一つでも厳しいのに二つもあったらさすがに「

「私は大丈夫だ。だが七の言うとおりで^{なな}ここで会議している余裕はない。
ここで会議を終わりたい。意見のあるものは・・・ないようだな。
これで本日は終わりとしよう。では、さらば。」

十二^{じふに}と言われる人物はそれだけ言うときささと姿を消してしまった。

「全くあいつは。って九。なんで誰もいないんだ。」

「会議が終わったのですからここからいなくなるのは当たり前ですよ。」

「それならなんで九は残っているんだ。会議は終わってるといつのに。」

「それは。」

「さっきの話か？」

「そうです。」

先ほどもいいましたがあれをほっといてまで関わる問題とはどうしても思えないのです。」

「まあそうだろうな。」

我々が危険視しているのは彼と彼女の力が未知数ということだけだからな。」

「未知数？彼と彼女の力は分かっているのではないのですか？」

「いや、ただひとつ言えるのは行方が分からなくなる直前に彼女からあの事件より強力な力が

観測されたことだけは確かだ。たった一人だったにも関わらずな。」

「それでは彼女は成長しているとしても。」

「それは分からないが彼とだけは出逢わせないほうがいい。」

最悪、我々でもどうしようもなくなる。」

「それは考えすぎだと思います。我々がどうしようもないことなんてそれこそ……ですが

七と十二ななの言ういとおりの問題は我々が動いた方が早いのでしよう。

だいたい疑問も解決しましたので帰ります。ではさようなら。」

「ああ。杞憂だといいたが。」

そう呟くと最後にいた人物、七ななと言われた人物も消え去った。

最後に残ったのは物言わぬ会議室だけだった。

閑話（後書き）

明けましておめでとございます。

今年もよろしく願います。

誤字、脱字、感想などあればよろしく願います。

屋上にて（前書き）

彼女登場（微妙）

屋上にて

若い人は最悪とよくいうけど本当に最悪な場合は最悪って言えないと思う。

なぜなら僕が今、まさにそういう状況だからだ。

縛られて、友達を人質に取られて、どんなマンガの話だよ。

でもあえていおう。最悪だ。どうしようもない。どうしよう。

これから僕、どうなるんだろう。

「そこまで心配することもない。君はそんな形なりでも、歩く不幸と呼ばれた男。

たとえチビでメガネで冴えなくても君はなんとかするのだろう。

だが俺は、それを凌駕するがね。」

生徒会長はようやく気味の悪い笑いを止め、また僕に話しかけてきた。

ちなみに僕の視界には会長はいない。

敵に心配されるなんて、僕って奴は。……ってあんまり心配されてないから。

しっかりしろ自分。

「で会長はこのまま僕を縛っていてどうするつもりなんですか？」

「うむ。俺の考えでは、君ならこの程度の縛り、簡単に解いてしま
うに違いないと

思っていたのだが、どうやら買い被りすぎたらしい。これはペナ
ルティィだな。」

僕はただの高校生だって。人よりちょっと不幸でちょっと不運なだ
けのね。

なのにペナルティってペナルティ？ペナルティ、某検索サイトで調
べると最初に

サッカーが好きなお笑い芸人が出る。やっぱりって思った人、凡人
だね。

「ペナルティって何ですか。そんなことをされる覚えはないんです
けど。」

もちろん縛られる覚えもないし、友人を人質にとられる覚えもない
けど。

「いや、君にはない。俺にペナルティだ。今からゲームをしよう

と思っている訳だが

その前に音君と賭けをしていてね。彼は見事に賭けに勝ったという訳だ。

だから彼との約束どおり君を縛っている縄を外そうと思う。」

「なるほど、絶対有利な状況が覆されるからペナルティですか。」

「そういうことだ。まあこの程度は全然問題ない。むしろ計画どおりだ。」

「で僕は縄が解かれたら帰ってもいいんですか？」

「別にかまわないよ。君が逃げれるならな。さてゲームの内容は簡単だ。

この校舎のどこかにいる音君を救い出し、学校内から脱出するだけだ。

実にシンプルだろう。ちなみに君ひとりで逃げたとき音君の命は無いと

思っ構わない。」

「なるほど、畏がどっさりあるってことですか。」

「いや、君の友人の前で君を壊してあげようと思って、畏は用意していない。」

つまらない罠に引っ掛かって君が死ぬのは忍びない。」

「そうですか。ところで何時、縄は解いてもらえるんですか？」

「もうすでに解いているよ。それではゲームスタート。」

いつの間に縄を解いたんだろう。全然わからなかった。

こっちは警戒していたにも関わらずだ。いくら僕が鈍いとはいえ、縄に触れずに縛っている縄を解くことが可能なのか。

そんなことを可能にする会長は多分、かなり、いや、絶対危険だ。注意しなきゃ。

ともかく音おとを助けて逃げよう。ドアに手を掛ける。

その刹那の時間に僕は悟った。このドアはまずいと。

だが僕は思っても行動することができなかった。

そして本日二度目の気絶をした。感電で。罠がないって嘘かよ。

人は簡単に信じないほうがいいと悟った僕だった。

まあ、敵の言葉は簡単に信じるなっこと。

当然、起きたときに、僕の部屋のベッドで夢オチということでもなく学校の屋上だった。

現実はどこまでいっても現実だった。せめて夢オチだったらよかったのに。

「目が覚めたかい。まさか引つかかるとは。また俺は君を買い被りすぎたらしい。」

「これは彼との賭けの有る無しではなく、自分にペナルティだな。」

すぐに自分を罰したいところをみるとどうやら会長はマゾらしい。

どこにも姿はみえない。マゾにいたぶられるって。

「罾がないと言っていたように思いますけど。嘘だったのですか?」

「敵を騙すにはまず味方からという言葉があるがやはり敵を騙すのはまず敵ではない

といけないと思わないか?」

「いや、そんな当然なことを言われても、だいたい一般の高校生ならどつちにしる

あんな畏から逃げれるわけないでしょう。」

「まあ君が仮にあの感電ドアを抜けたとしても校舎内には睡眠ガスを充満させておいた。

なのでどんなに頑張っても無理だ。どんまい。」

敵にどんまいされてしまった。無性に泣きたくなるのはなんでだろう。

僕がどんなにがんばっても絶対屋上ルート直行じゃん。

「すべて会長の掌の上ってわけですか。」

「まあそういうことだ。それにしても君は余裕だね。今回は屋上から吊るされている

というのだ。」

「ええ、どうせ暴れてもどうしようもないですから。」

「君はすごいな。本当、買い被って正解だった。ああ。最高だ。

ちなみに音君おとなら既にこの世界にはいない。残念なことに君が殺したんだ。」

「どういうことですか。」

「簡単なことだ。あのドアがスイッチでそれが彼の命綱だった。ただそれだけのことさ

助けようとして殺すなんてなんて滑稽。君さえこなければ彼は今日も生きていたのに。

彼の最後の顔を教えてほしいかい。えっ。俺、死ぬのかって顔だったよ。

そこには喜びも怒りも哀しみも楽しみもなかった。ただ疑問。疑問を感じた顔だったよ。」

楽しそうに。嬉しそうに。愉快そうに。まるでついでほんのおまけみたいに音の死を語る。

だからひさしぶりに怒ることにした。たった唯一の友達のために。

でないと友人であった彼は報われない気がした。

「てめえ。ふざけやがって。」

「おお。やっと本性が現れたか。そっちが君の素の顔か。同一人物とは思えないほどの

変わりようだな。雰囲気も声の質も明らかにちがう。」

「それがどうかしたか。てめえだけは殺す。この名にかけてな。」

「ハッ、ハッハッ。その状況でどうするっていうんだい。歩く不幸くん。」

「たしかに屋上に吊るされてはいるが、それだけだ。たったそれだけのことなんだよ。」

「なにを」

言ってるんだと最後まで声は続くことはなかった。

なぜなら僕の目の前をたった今、通り過ぎって言ったからだ。

屋上から地上に真っ逆さまに。最後に聞こえたのはグシャという鈍い音だった。

屋上から引き上げてくれたのは音おとではなく見知らぬ女だった。

僕と彼女の物語がいま、はじまりを告げたことをこのときの僕は当然知る由もなかった。

屋上にて（後書き）

感想、誤字、脱字などあればよろしくお願いします。

彼女と僕（前書き）

感想などあればうれしいです。

彼女と僕

「なんで、わかったの？」

彼女の最初の言葉は疑問だった。

「何がです。」

質問に対して、質問で返す。これって結構いやな人だよな。

「先ほどの貴方の発言からまるで私がここに来るのが分かっていたみたいだったから。」

「ああ。あれははったりです。」

「うそね。だって確信に満ちた声だったもの。」

「まあ、そういうこととしておきましょうか。ところで貴女は誰ですか。」

「ワタシ？ワタシの名前は鏡見かがみ伽耶かや。」

喜びなさい。わざわざこのワタシが貴方に逢いに来てあげたのだから。」

確かに鏡見^{かがみ}さんは背も高く、髪もロングでかわいいというよりは美人で

僕に会いにきたと言われて喜ばない訳はないけど、今までの経験から言ってしまうと

人は怪しい。怪しすぎる。怪しさ大爆発だ。それぐらい彼女の言葉は信じられなかった。

「えーっと。確か初対面ですよ。そんな因縁つけられる覚えがないんですけど。」

「ええ、初対面のはずよ。でも、たまたまワタシがこの場所にきて、たまたま、

貴方の命を救う。なんてことがあるかしら。今どき、B級映画でもこんな展開は

ありえないわ。でもそれが起こった。だからかしらね。貴方風ないうと因縁を

つけたかったのかもね。それに全然関係ないけど」

「ワタシが名乗って、貴方が名乗らないなんて礼儀に反するじゃないかしら。」

そう言われたので一応名前だけ名乗っておく。

「へえ、凜^{りん}くんっていうの。女の子の名前みたいね。」

「まあ、よく言われます。それで鏡見^{かがみ}さんは僕に何か用でもあるんですか？」

「ええ。貴方に会いにきた。とは言ったけど、正確には違うわ。あのエネルギーを

発生させた人物に逢いに来たの。最初は彼、えっーと生徒会長さんだっけ。

あの子かと思った。彼も凄いエネルギーだった。まあ一般人にしてはだけどね。

でも貴方に比べれば月とすっぽん。相手にすらならなかった。だからよ。

彼がここにいなくて貴方がここにいるのは。」

そついうと彼女の雰囲気ガラリと変わる。

まるで腹を空かせたライオンが獲物を見つけたときのような

強者が弱者から全てを搾取するような

嫌な顔だ。

さっきの状況、吊るされていたほうが全然ましな気がする。

「ええ、貴方に用はあるわ。ワタシの食事エサになってもらうわ。」

「ちょっと。待ってください。なんで僕が鏡見かがみさんの食事エサにならな
いといけないんですか？」

「ワタシの能力はエネルギーをかなり使うの。だから。」

「っていうか。そもそも能力ってなんですか？」

「これから死ぬ人に冥土の土産として話してあげるのもいいけど、
ワタシもこれ以上

あいつらに監視されるのは、真っ平ごめんだし、あんまり時間も
ないのから、

死んで、死ねば分かるかもしれないわ。」

そついうと鏡見かがみさんが僕の体に触れる。

僕には到底反応できない速さで。

鏡見かがみさんが僕に触れた瞬間、凄まじい光が僕の体からあふれ出す。

それはまるで某ゲームの自爆技に近いイメージ。

どうしようもない終焉。

さすがに僕も死を覚悟した。が徐々に光は収まっていく

「うそでしょう。ワタシの方のエネルギーが満タンになるなんて、貴方ってば

最高のエネルギータンクね。これで貴方が死ぬ理由もなくなったわね。」

「なにがなんだか僕には分からないんですけど。」

「そうですね。本来ならワタシが触れた瞬間、貴方、凜くんは死ぬはずだったのに。」

「どういづことですか?。」

「簡単に言えば、エネルギーっていうのは生命力。これがなくなれば死ぬわ。」

ワタシは貴方のエネルギーを全部取るうした。でもワタシの方の容量が先に一杯になっちゃったため、貴方は死ななかつたの。」

「もし、僕のエネルギーが足りなかつたらどうなってたんですか?。」

「さっきの生徒会長みたいに自殺したわ。」

「自殺？鏡見^{かがみ}さんが殺したのでは？」

「えーっとなんて言えばいいのかな。エネルギーがなくなったら灰になって散る

とかいうことではなくて、エネルギーが無くなるとこの世に存在してはいけない

と思いきみ、自ら自分を殺すの。つまり自殺。まあエネルギーが無くなるって

いうのは、大抵能力の使いすぎだから、自業自得なんだけどね。」

「つまり、会長は貴方に触れられてエネルギーが無くなり自殺したっていうことですか。」

「そういうことね。ワタシも焦っていたからね。それに凜^{りん}くん、殺されそうだったし。」

「焦る？何に対して焦ってるのですか？」

「それはね。・・・噂をすればってやつね。」

そういつて鏡見かがみさんが見た方向には男か女か分からない人間が立っていた。

鏡見かがみさんの眼は険しかった。先ほどの僕を見たときとは違い、余裕がなかった。

まるで勝ち目のない戦いを挑むような眼だった。

「だれですか。」

答えは解っていたけど、あえて鏡見かがみさんに聞いてみる。

「敵よ。」

はあ、全く一難去ってまた一難さらにもう一難だ。

今夜は長い夜になりそうだ。

彼女と僕（後書き）

楽しんでいただければ幸いです。

敵、出現

鏡見^{かがみ}さんが敵といった存在はどうやら女の人みたいだった。

というのはさっきは暗闇にいたからかよく見えなかったのだが近くで見ると

まあ出るところ出てるし、ただし顔の方は仮面をかぶっていて分からない。

仮面の特徴として大きく4の文字が・・・つまり死。殺されるってこと？

「貴方、ワタシを監視していた人間の仲間ですね。だってあいつらと同じ気がしますもの

ワタシの大嫌いな匂いがね。さてなんでワタシを監視していたのか話してもらいましょうか。」

どうやら鏡見^{かがみ}さんはこの正体不明の女の人と戦う気のようにだった。

でも一応は警戒しているようでなかなか仕掛けようとはしない。

さっき僕に仕掛けたみたいに簡単には行かないみたいだった。

「どうして仕掛けないんですか？」

「答えは簡単よ。監視していた人間なんかとは桁違いに強いからよ。いくら凜^{りん}くんで回復したとはいえワタシでも勝てるかどうか。」

「そもそも敵ということが勘違いじゃないんですか？」

「ワタシが追われていたのがこいつだから間違いないわ。監視者を倒してから

ずっと追われていたの。エネルギーが回復していなかったら逃げることはできなかった。

でもここで決着つけて晴れて自由の身よ。」

「ところで最大の疑問なんですけど、なんで監視されてるんですか？」

「それが分かれば苦労はしないわ。生まれてからずっと監視される身にもなってみなさいよ。」

「うっということこの上ないわ。」

「生まれてからなんですか？」

「ええ、生まれてから1度しかこいつらを出し抜いたことがないわ。これで2度目。」

3度目はないと考えた方がいい。だからここで倒しておくのが一番

だと思ったわけ。」

「へえ、僕まったく関係ないですよ。帰ってもいいですか？」

「いや、関係なくもないわ。凜くんにも監視者がついていて、てっきりワタシの監視者かと思い、倒してしまったけど。」

「僕にも監視者が、そんな馬鹿なことが」

「ありえるわけない。とでもいいたいの？だいたい凜くんみたいな一般人が気づけるわけないでしょう。」

「ワタシでも気づけたのは、あのころからだもの。」

なんかそのときのことを思い出しているみたいだ。

鏡見さんにとってはとても大事な思い出らしい。

だからそれについては訊くの躊躇われた。

「ともかく、ワタシと凜くんにはあの仮面の女を倒さないと未来はないってわけなの」

そこで始めて仮面の女が口を開く。

今まで僕たちの会話を待っていたみたいだ

律儀な人だな。

「そんなことはない。君たちが今後一切出逢わないと誓えるなら見逃してあげてもいいわ。」

もちろん監視はつけさせてもらうけどね。」

「どづいづいと?。」

「下手に藪を突いて蛇を出したくないのよ。我々はね。で返答は?。」

「ワタシは嫌。別に凜^{りん}くんに会わないのはいいとしても監視されるなんてもう真っ平ごめんね。」

「僕は」

「もちろん。いやに決まってるわ。監視されるなんて誰でも嫌なはず。」

「それは貴女の答えであって彼の答えではない。で返答は？」

「僕は監視されてもいいです。でもそれは知らなかったら。知ってしまったので

だから監視は御免です。もちろんその返答にはNOで。」

「残念だわ。藪をつつくなんてことはしたくなかったんだけど。

十二賢の一人、コードネームは「四」（し）。覚えなくてもいい。すぐに忘れるから。」

そのセリフが終わると鏡見^{かがみ}さんが動く。

つづいて四^しが動くがそのうごきは素人の僕が見ても遅い。

先制攻撃はどうやら鏡見^{かがみ}さんのようだ。

思いつきり殴りかかる。って殴るの？　なんか不思議な力を使うんじゃないか。

四^しの仮面に思い切り当たるがびくともしない。攻撃が効かないと分かる。

瞬時に元の場所に戻る。

「うそつ。ワタシの力を受け止めた。」

「何を驚いているんですか？」

「凜くん。君は馬鹿なの。いくらワタシが女だとしてもあの速さで殴ったのよ。微動だにしないっていうのはおかしいわ。」

「反応できない速さってどういふこと。これでも警戒していたのに。警戒Lv2にUpと。でも、この程度なの。」

「そんなわけないでしょう。この仮面女。全部はいてもらうんだから。」

そういつと鏡見さんは先ほどよりもさらに速く動く。

目で捉えるのがやっと、それはどうやら四もそうみたくて反応できていない。

鏡見さんが四の体を捉える。今度は蹴り。それも踵落とした。

これを喰らったら一溜まりもないだろう。思いっきり頭に入る。

まさに会心の一撃。でも鏡見さんから聞こえたのは

「うそつ。効いていない。」

という割とやばめなセリフだった。

「えっと。それで終わりなの。確かに普通の人に対しては有効でしょうけど」

能力者に対しては効かない。」

「なめんじゃないわよ。」

というときよりもさらに速く動こうとするが、

「いい加減、見飽きたわ。地に這いつくばれ。」

という四の言葉で鏡見^{かがみ}さんは動けなくなる。

「なんで動かないんですか？」

「動けたらとっくに動いているわ。」

「そういうこと。彼女はアウト。多分動けないわ。君はどうする？」

「いやどうするって言われても、そもそも僕と彼女を監視していたのは何故ですか？」

「それは言えないの。守秘義務。」

「では貴方たちは何者です？」

「正義の味方ね。」

「胡散臭いですね。なら貴方たちの目的は？」

「世界平和よ。」

「ますます胡散臭いですね。そのためなら、犠牲は問わないとでも？」

「その通りね。」

「どうしてその仮面は？いやさっぱりいいです。」

「もうそろそろ時間稼ぎはいい？そんなことしても彼女はもう動けないと思つわ。」

「わざわざ分かっていて付き合ってくれるなんて律儀ですね。」

「最初も不意うちすれば僕と鏡見さんなんか簡単に倒せたでしょうに。」

「いや、そうするわけにもいけない理由があるの。」

「そっちにも事情があるってわけですか。」

「ところで僕と鏡見さんはどうなるんですか？」

「ただ忘れてもらうわ。それだけ。殺しはしないわ。」

「それを信用しろとでも。」

「信用しなくてもいいわ。どちらにしろ忘れてもらうのだから。」

「ふーん。殺しはしないんですって。鏡見さん、どうします？」

鏡見さんはどうやって四の束縛から抜けたのか分からないけど

とりあえず立っていた。長い髪の毛を逆立てて。

「まったく。ワタシもなめられたものだわ。敵に背を向けて、悠々とおしゃべりだなんて

もう止めた。遊ぶのは止めて、真面目に戦いましょうか。」

その瞬間、鏡見かがみさんの手から凄まじいエネルギーが放たれる。

当然、凄まじい力を感じたのか。四はその場から飛びのこうとするが

遅い、あまりにも遅かった。鏡見かがみさんから放たれた力が直撃する。

今度はさっきみたいに無事ということもなく無様にふきとばされる。

がすぐに立つ。直撃したにもかかわらずあまりダメージはないみたいだ。

「へえ。あれを受けて無事なんてどういう体してるのよ。」

「いや効いたわ。完璧に油断。まさかあれを抜けるなんて。警戒し
V最大に変更ね。」

そういうと急に場が重くなる。雰囲気きょうきが重くなるのではなく実際に重い。

自分の体がまるで自分の体じゃないみたいに。

それを鏡見^{かがみ}さんも感じたのか、

「なにこれ。自分の体がこんなに重いなんて、まさか」

「その考えで多分正解よ。」

「じゃあ私がぶん殴っても蹴っても効かなかったのは？」

「重力を操作し、無効化したの。」

「そんな簡単に能力をばらしていいの。」

「どうせ忘れるから問題はないわ。」

今度はさっきとは違い四^しが攻撃に転じる。

ゆっくりだが確実に鏡見^{かがみ}さんに近づく。

さっきよりも強い重力がかかっているのか鏡見^{かがみ}さんは動けない。

「なんなのよ。これ。いつもより力を使ってるのに全然動かない。」

そして鏡見^{かがみ}さんを掴み、上にぶん投げた。

「うそでしょう。」

ただそれだけの行動だったはずなのに鏡見^{かがみ}さんは風船のように軽やかに飛ぶ。

飛んだあとに待つのは落下だ。目算で10m以上は飛んでいる。落ちたらただじゃ済まない。

最悪死ぬ。さすがに焦った僕はあわてて受け止める。だが思ったより衝撃はない。

「ちょっと力加減間違えたわ。さすがに殺すのはまずいのよね。」

どうやら四^しが重力を操作して僕への衝撃を軽くしたみたいだ。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫？そんなのもちろん大丈夫なわけないでしょう。あなたも体験してみる？」

三途の川が見えるかと思っただわよ。」

そついう鏡見^{かがみ}さんはちよっぴり涙目だった。

「遠慮しときます。」

「でも、おかげでいいこと思いついちゃった。」

「いいことってこの状況をなんとか出来るんですか？」

「ええって、いつまでお姫様抱っこしてるのよ。降ろしなさい。」

とりあえず鏡見^{かがみ}さんを下ろす。そして改めて訊き直す。

「でどつするんですか？」

「それはいつするのよ。」

そついつ僕の手を握る。

「何ですか？これから愛の告白でもするんですか。」

鏡見^{かがみ}さんは顔を真赤にして否定する。

冗談なのに。

「違うわよ。凜^{りん}くん。まあ見てなさい。」

「まさか」

何故か有利だったはずの四^しが焦っている。

仮面かぶってるからよく分からないけど。

「いくら、仮面^{あなた}女が強いからって無限の力をもってるわけじゃない。それならこちらは無駄にエネルギーの多い凜^{りん}くんを使つまでよ。」

そのとき僕の体が光りだす。

まるで先ほど鏡見^{かがみ}さんにエネルギーを吸われたときみたいに。

「嫌な予感がひしひしするんですけど。」

「ええ凛^{りん}くんの考えたとおりよ。まずは一発目。」

さつき放たれたの数十倍のエネルギーが四^しに向かう。

形振り構ってられないのか。場の重力が軽くなる。

直撃はまずいのだろう。なんとかその力を上に弾く。

「あれを耐えるなんて、凄いわね。でも場の重力が軽くなったということは

どうやらワタシの考えは正しいようね。行くわよ。一発目」

さつきよりもさらに大きくなった力が放たれる。

だがそのエネルギーをなんとか四^しは止めている

「本当に凛^{りん}くんは凄いわね。これだけ使っても全然減る気配すらない。」

「思ったんですけど、あれまともに当たるとどうなります。」

「間違いなく死ぬわね。」

「そんな冷静に返さないでくださいよ。どうするんですか？」

「まあいいじゃない。ドンマイ、ドンマイ」

「ドンマイじゃない。」

その叫びと同時に四に力が直撃する。

だがそのあとに残ったのは無残な死体ではなく、大きく空いた床のあなだった。

「なるほど、自分に重力をかけて床から逃げたのね。」

「そんな冷静に敵の逃げ方を解説している場合ですか？」

「どうせ追っても無駄よ。だって気配すら感じないもの。」

「じゃあ」

「ええ、結局何も聞くことができなかつたってこと」

「それなら僕は何のために戦ったんだあー。」

という僕の空しい声が校舎内に響いたとか響かなかったとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7580f/>

タイトルなんて意味のない物語

2010年12月10日01時45分発行